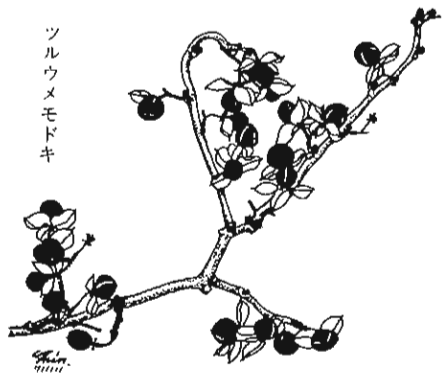
ツルウメモドキの果実

樹木だより



身を切るような風が吹いた日に、国道12号の道路樹ナナカマドから、治山苗木用にと、赤〜橙色の美しい果実を採っていたら、雪が風に運ばれてきた。初雪の後、２日たって、光珠内の裏山へ、晩秋の木の実採りに行った。２ｍほどの竹竿の先に釣針型の金具をつけた道具をもって、アズキナシやケヤマハンノキの果実を採っていたら、キタコブシの大枝に、ツルウメモドキがからまって、美しい果実が鈴なりになっているのが見えた。それではと、つなぎロッドの高枝鋏を改めて運び、５ｍにのばして、ツルウメモドキの枝を切り落した。枝が固くて、しかも樹の枝にからんでいるから、切断中に、大事な果皮が、種子までも、ぱらぱら頭上へ落ちてきた。

ツルウメモドキはニシキギ科の蔓性木本であり、小枝と冬芽の形態によって、北海道の他の茎性木本とたやすく区別できる。つまり、イワガラミとツルアジサイは冬芽が対生について気根をもち、サルナシ（コクワ）やマタタビは冬芽が葉枕の内にあって外から見えず、ヤマブドウやツタは巻ひげや吸盤をもつし、ツタウルシの冬芽は有毛だし、チョウセンゴミシはだ円形の冬芽とだ円形の葉痕をもつ。ツルウメモドキは球形の冬芽と三日月形の葉痕をもつ。

この果実は乾いていて（さく果）、うす黄色、熟すと３つに裂けて、そりかえる。すると、中から、黄橙〜黄赤色の仮種皮をもった種子が現われる。暗褐色の小枝、黄色の果皮、そして橙色の仮種皮の組み合わせは、霜枯れの山野に美しい点景を添える。仮種皮をもつことが、ニシキギやツリバナの仲間であることを保証しているようだ。そういえば、裂片数はいろいろながら、果皮も似ている。

美しい果枝はお花の材料として、珍重されて高価だそうで、それは果実（み）がたわわになることが少ないことや、高いところになること、林木の敵としてツル切りされることに原因があるらしい。もっとも、私の採った果枝は上向きに果実がついていて、お花用の下向きものに比較して、やや値うちが低いそうな。

（防災林科　斎藤新一郎）